

## 2020年度ドイツ経営経済学会第82回大会参加報告

学習院大学 小山 明宏

従来 Pfingsten（聖霊降臨祭）に行われていたドイツ経営経済学会年次大会は、今年2020年の、第82回大会から、大学が春休み中である3月に行われることになり、今年はその第1回として、3月18日（水）～20日（金）、フランクフルト（マイン）大学で、ある意味鳴り物入りで開催される「はずであった」。筆者は一昨年以來、今年も日本経営学会からのオフィシャルな代表として参加し、歓迎されることになっていた。

ところが、周知の通り新型コロナウイルス騒動が巻き起こり、3月に入ってからドイツでも感染者が増加していた結果、突然3月10日に大会事務局から会員へのメールで、大学のキャンパスでの参加を望むか、オンラインでの参加を望むかのアンケートが行われた。筆者は大学キャンパスでの参加を望む返信をした。そして翌11日、大会事務局から通知が来て、圧倒的多数でオンライン開催に決定した、とのことになったのである。1994年のパッサウ大学での年次大会から毎年参加している筆者にとって、これは驚異的なショックだったが、大慌てでホテル、航空券のキャンセルに走り、何とか事なきを得た。ペーター・ヴァルゲンバッハ会長も大慌てだったようで、メールで経緯を聞き、また無事にすべてキャンセルできたことを伝えると、かなり混乱していること、そして筆者がキャンセルできて喜んでいる、とのことばを得た。その後、事務局から筆者の参加記録にあたるものが送られてきている。

下の写真はキャンパスでの開催が取り止められ、会期後の3月27日に送られてきた大会組織委員会メンバーの写真である。彼らにとっては準備も大変だったであろうしまさに痛恨事であったと思う。



そしてここに記されている、'Digitale Transformation' というのが今大会の統一テーマである。前述の3月11日の大会事務局からのメールでも、「キャンパスで発表を行う代わりにオンラインで発表を行う、これは今度の統一テーマに照らしても誠に適切といえる処置である」、とはっきり書いてあって、筆者は「おやおや・・・」という気持ちで一杯だった。事前のHPにあった大会案内は次の通りである。「ビッグデータ、クラウドコンピューティング、AI-デジタルテクノロジーの新しい開発は、社会、ビジネス、科学の日常生活に大きな変化、新たな課題をもたらす。

科学分野としての経営学はこれらの進展にどのように反応できるだろうか？ これらのイノベーションは、教育と研究の分野でビジネス管理をどのように変革するか？ また、デジタル化は企業や市場にどのような影響を与えるか？

統一論題では、これらの質問やその他の質問について幅広い議論と批判的な検討を行うことを目的としている。

これはまあ、ビジネス界にとっても興味ある、重要なトピックだが、経営学的な「料理方法」が問われるところだろう、という気であった。そして大会そのものは前述の通り期間中、YouTubeによる発表がなにかしらか放映されたが、準備の手間もあってかほんの一部がとり上げられるにとどまったのは致し方ないことであった。結論としては、筆者はこの統一論題に関する説明や考察はあまり得られなかった、ということである。ただし不満はない。

今大会のもう一つの重要な話題として、7月の学会事務局からのメールで、2021年3月にデュッセルドルフ大学で開催予定だった第83回年次大会が早々と取り止めになり、2022年3月8～11日へと延期されたことである。2022年予定だったリューネブルグ大学での大会は2023年へと延期になった。

ドイツでの新型コロナウイルス騒動への立場は筆者には正確にはわからないが、前述の延期決定は、それが楽観的でないことを表していると思われた。

2年先になってしまったが、デュッセルドルフは日本人が多数住み、とりわけなじみのある街なので、日本経営学会会員の先生方が多数参加されることを期待したい。